The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞川崎佐知子著『『狭衣物語』享受史論究』
Author(s)	松本, 大
Citation	語文. 2010, 95, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

川崎佐知子著『『狭衣物語』享受史論究』

松本　大

本書は、『狭衣物語』の代表的な注釈書である里村紹巴『狭衣下紐』を発端にして、『狭衣物語』の享受の一端を明らかにするものである。構成は、四章十一篇の論考を収めた〔論文篇〕と、五本の翻刻紹介を収めた〔資料篇〕からなる。

以下に、〔論文篇〕の目次を大項目によって示す。

第一章　里村紹巴と『狭衣物語』
　第一節　『狭衣下紐』の伝本
　第二節　『狭衣下紐』の注釈方法
　第三節　紹巴所用『狭衣物語』とその意義
　附節　紹巴と奈良連歌
第二章　三条西実隆『狭衣系図』の諸問題
　第一節　三条西実隆『狭衣系図』の諸本と特色
　第二節　基礎資料としての『狭衣系図』
第三章　猪苗代兼寿の『狭衣物語』享受
　第一節　『狭衣物語抄』の伝本
　第二節　『狭衣物語』の関連資料
　第三節　延宝五年の「狭衣」校合
第四章　『狭衣物語』享受の周辺
　第一節　謡曲『狭衣』について
　第二節　河村秀根『狭衣入紐』について

第一章では、『狭衣下紐』の基礎的研究と位置づけられるもので、伝本を系統別に分類整理し、さらに注釈の特徴を『源氏物語紹巴抄』との比較により導き出している。氏は『狭衣下紐』に『源氏物語紹巴抄』が抜き書きによって使用されている箇所を指摘し、「『源氏物語』を注釈するのと変わらないやり方で、『狭衣下紐』を作成した」（四〇頁）、「源氏注で定着していた事柄が狭衣注に転用されたことは評価すべき」（四四頁）と、紹巴の注釈方法が源氏学から受け継いだものであるという指摘をしている。そして、紹巴による『狭衣物語』の注釈書作成・本文校訂等の事跡が、それ以降の『狭衣物語』研究に多大なる影響を与えたことを踏まえた上で、「紹巴が『狭衣物語』における絶対的な権威であったことは疑い得ない」（六三頁）とし、「いまあらためて、その功績を認識し、正当な評価を与えるべき」（六三頁）と、これまであまり顧みられてこなかった狭衣注釈における紹巴の学問的な価値を訴えている。

第二章では、『狭衣下紐』の作成に関わって、実隆の『狭衣系図』が先行する注釈書として作成に大きく関与している点について考察している。『狭衣下紐』に見える系図や人物評が一部補正されつつではあるものの、大部分が『狭衣系図』に依拠したものであることを述べている。氏は、紹巴が『狭衣系図』を重く用いた意図を、「三条西家の源氏学と同様に、『狭衣物語』研究を末長く継承され尊重される学問として、世の中に定着させようとして

いた」と推察し、さらに「自らの狭衣学の権威付け」（一二四頁）に利用するためであったと説く。前章同様に紹巴の狭衣学を考えていく上で大変重要な指摘である。

第三章では、『狭衣下紐』以降の注釈書として、猪苗代兼寿の『狭衣物語抄』を取り上げており、特にその成立の背景について深く考察している。兼寿と伊達家や近衛基凞との接点を指摘した上で、『狭衣物語抄』の作成に近衛基凞が深く関わっていたとする。『狭衣物語抄』が作成された背景には、兼寿と基凞による『狭衣物語』の校合があるとし、その校合過程から偶然的に生まれていった『狭衣物語抄』を想定し、この注釈が本文校訂の際の「副産物」であるとする見解を示している。また『狭衣物語抄』の内容が優れている所以も、「兼寿と江戸前期の縉紳近衛基凞とをとりまく広範な文化的背景に求めることができるのかもしれない」（一七〇頁）と述べる。

第四章では、実隆作の謡曲『狭衣』と河村秀根の『狭衣入紐』が扱われており、「享受史の展開を通史的に把握するように努めた」（結語）と述べているように、それぞれの時代における『狭衣物語』享受の一端を探っている。

〔資料編〕では、陽明文庫蔵近衛尚嗣筆外題『狭衣下紐』・陽明文庫蔵近衛信尹筆外題『狭衣下紐』・陽明文庫蔵近衛尚嗣筆『狭衣系図』・東京大学総合図書館南葵文庫蔵『狭衣系図』・宮城県図書館伊達文庫蔵『狭衣物語抄』の五本が翻刻紹介されている。これらは五本はいずれも未紹介資料であり、〔論文篇〕でその資料的価値が実証されている。学術的貢献は言うまでもない。特に『狭衣下紐』二本の紹介は、「すべての系統の代表的な本文を簡便に活用できるようになった」（結語）と述べられているように、今後の『狭衣下紐』研究に大きな役割を果たすことになろう。

川崎氏の論考は各注釈書の諸本整理・成立時の時代背景・人物関係が丁寧に踏まえられており、盤石かつ緻密なものである。論証に支えられながら、これまでの『狭衣物語』の研究においてあまり重要視されてこなかった紹巴にスポットライトを当て、一貫してその存在意義を問い直すという姿勢が貫かれている。また氏の注釈研究は、『狭衣物語』という作品そのものの読解の深化に繋がる点もある。注釈書研究の成果が、作品研究に反映されていく可能性をも示唆している本書の意義は深い。

（思文閣出版、二〇一〇年二月、六三六頁、一二六〇〇円）

（まつもと・おおき　本学大学院博士後期課程）